

韓国の高等学校におけるドイツ語教育の実情¹⁾

吉 満 たか子

広島大学外国語教育研究センター

1. はじめに

筆者は2008年8月に、ハンブルク大学ドイツ語サマースクールの日本人参加者と韓国人参加者を対象にアンケートとインタビュー調査を行った(吉満 2009)。インタビュー調査で浮かび上がったのは、日本人回答者は質問に対して必要最低限の答えしかしない傾向にあるのに対し、韓国人回答者はより多くのことを語ろうとする傾向にあることであった。多くを語ろうとする傾向は、サマースクールでのクラスが同じ韓国人と日本人を比較した場合にも見られ、それはどのレベルのクラスにおいても観察された。

アンケート調査の結果からは、韓国人回答者14名中9名が高等学校でドイツ語を学んでいるのに対し、日本人回答者20名は全員大学でドイツ語を学び始めたということがわかり、インタビュー調査での差異は、高等学校でのドイツ語学習経験の有無が大いに関係していると推測された。

筆者は、日韓の学習者を比較するためには、韓国の高等学校におけるドイツ語教育の実情を把握することが不可欠であると考え、2009年9月にソウルで3つの高校を訪問し、授業を見学した。今回訪問したいずれの高校においても教員のレベルが高く、実に気配りの行き届いた授業が展開されていた。しかし現地教員やドイツ語教育関係者との懇談では、韓国の高校におけるドイツ語教育も様々な問題を抱えていることが明らかとなった。

本稿では韓国での授業見学を報告し、韓国の高校におけるドイツ語教育の抱える問題について考察する。

2. 視察報告

現地での授業見学は、2009年9月14日～18日に行った。ソウルのゲーテ・インスティトゥート(Goethe-Institut Korea) 教育協力部のバク・ソンウ氏の協力により、ソウル大学校師範大学付属高等学校(Seoul National University High School)、ソウル藝術高等学校(Seoul Arts High School)、梨花女子外国語高等学校(Ewha Girl's Foreign Language High School)から見学の許可を得ることができた。以下にそれぞれの学校の特徴と見学した授業について報告する。

2.1 ソウル大学校師範大学付属高等学校(Seoul National University High School)

ソウル大学校師範大学付属高等学校(以下ソウル師範大付属高校)は、1949年に創立された男女共学の国立高校である。この学校は、ソウル大学校師範大学の教育実習校であり、日本の文部科学省に相当する韓国政府の教育科学技術部が、常設の教育研究校として指定している高等学校である。同校のパンフレットの表紙には「創造的でグローバルなリーダーを育成する学校」というモットーが掲げられており、1961年にはUNESCOのASPnet school²⁾(Associated School Project Network school)に認定されるなど、長年国際理解教育に力を注いでいる。また、2008年にはドイツ連邦行政庁の在外学校中央機関(Zentralestelle für das Auslandsschulwesen)に

より DSD-Schule³⁾にも認定されている。

生徒数は920人で、生徒は2年次以降「人文社会課程」と「理工工学課程」の2つのコースに分かれて勉強する。また、共学校ではあるものの、実際の授業は男女別のクラスで行われている。すでに述べたように、韓国的高等学校ではすべての生徒が第2外国語を履修しているが、同校では、すべての生徒が第2外国語としてフランス語またはドイツ語を履修する。DSD-Schuleに認定されたのを機に、同校では2009年3月⁴⁾にインテンシブ・コースが開設された。通常のクラスでは50分の授業を週3時間、2年間にわたって履修するが、インテンシブ・コースでは、通常のカリキュラムの枠内における週4時間の授業に加え、課外授業として6時間、合計10時間を1年次で履修する。2年次には通常のカリキュラムとして6時間、課外授業として3時間の合計9時間を履修し、希望者は3年次にも2年次と同時間数の履修が可能である(表1)。ただし、このインテンシブ・コースは2009年3月に開設されたばかりであるため、筆者が授業を見学した2009年9月の段階では1年生の履修者のみで、2年生と3年生の履修者はいなかった。

表1：ソウル師範大付属高校におけるドイツ語の履修時間数

	通常コース		インテンシブ・コース	
	通常授業	課外授業	通常授業	課外授業
1年次	3時間/週	0	4時間/週	6時間/週
2年次	3時間/週	0	(6時間/週)*	(3時間/週)*
3年次	0	0	(6時間/週)*	(3時間/週)*

*2010年度以降の実施予定

DSD-Schuleである同校では、在外学校中央機関からドイツ語母語話者の教師が派遣されており、韓国系ドイツ人のFr. Li-Ann PlöBerが、同校の専任教諭であるベ・ウィスク先生と共に授業を担当していた。授業はドイツ語専用の教室で行われており、この教室の椅子や机は可動式で、壁にはドイツの風景写真のポスターが貼られ、パソコンやプロジェクターなども設置されていた。

通常コースの授業は、週3時間のうち1時間は母語話者教員と韓国人教員による協同授業で、残りの2時間は韓国人教員が単独で担当しているとのことであった。また、インテンシブ・コースでは、週10時間うち5時間を母語話者教員が、5時間を韓国人教員が担当しているとのことであった(表2参照)。

表2：ソウル師範大学付属高校における1年次の授業構成

	通常コース	インテンシブ・コース
韓国人教員による授業	2時間/週	5時間/週
タンデム授業/母語話者教員による授業	1時間/週	5時間/週
合計	3時間/週	10時間/週

筆者は1年生通常コースのタンデム授業とインテンシブ・コースの母語話者教員による授業を見学した。次にそれぞれの授業の概要を述べる。

2.1.1 通常コースにおけるタンデム授業

見学したのは1年生36人のクラスで、このクラスは女子ばかりのクラスであった。教科書は、ドイツで出版されたティーンエイジャー向けの『Planet 1』⁵⁾を用いており、この日の授業では、Lektion 6の終盤が取り扱われていた。この教科書はLektion 16までであり、筆者が見学した時点で生徒は約5か月間ドイツ語を学習した後であったことから、おおよそ1か月に1つのLektionを終えるというペースで授業を進めているようであった。Lektion 6では、「提案をする」というコミュニケーションが学習目標で、学習する語彙は「学校で使う物」、文法項目としては「所有冠詞」、「否定冠詞」、「名詞の単数形と複数形の1格」、「3人称の動詞人称変化」、「möchte」が導入されている（Planet 1, 目次より）。

このタンデム授業では、Fr. PlöBerが中心となりドイツ語による授業を展開し、理解できたかどうかをベ・ウイスク先生が逐次韓国語で確認していた。表3はこの時の授業の流れを表にまとめたものである。

表3：ソウル師範大付属高校・通常コース1年生クラスでのタンデム授業

	授業での活動・作業	形態	教師の役割分担
1.	<導入> あいさつ (Guten Morgen!/ Wie geht es euch?/Habt ihr gut geschlafen?)	全体	母語話者教員：ドイツ語であいさつする 韓国人教員：理解できたか韓国語で確認する／答える際の手助けをする。
2.	<新課題> 教科書 (Planet 1, 44ページ, 練習問題10) の挿絵について教師が Was seht ihr? Was ist das? と質問し、生徒がそれに対して答える。	全体	母語話者教員：ドイツ語で挿絵について質問する／生徒からの答えを繰り返し、必要に応じて繰り返し発音させる 韓国人教員：生徒からの答えに含まれている重要な語彙を板書する／単語の意味を理解しているか、韓国語で確認
3.	ダイアログ (同上) を黙読させ、知らない単語をノートに書かせる。	個人作業	母語話者教員：机間巡回 韓国人教員：机間巡回
4.	ダイアログを1行ずつ音読した後、生徒からの質問に答える。	全体	母語話者教員：ダイアログを読み上げる／生徒からの質問にドイツ語で答える 韓国人教員：母語話者教員の答えを理解したかどうか韓国語で確認、必要に応じて説明する
5.	<ダイアログの発音練習と理解> ①教科書を見ずにダイアログを聞く。 ②3人ずつのグループで、プロジェクターで投影されたダイアログを見ながら役割練習。 ③発音に関して生徒から質問があった個所を全体で練習。 ④3分間を与え、各グループで発音練習。 ⑤生徒によるダイアログの発表。	個人作業 グループ 全体 グループ 全体	母語話者教員：机間巡回／生徒からの質問に答える／発表をうながす／発表者を決める 韓国人教員： 机間巡回／生徒からの質問に答える
6.	<応用練習> ①ヴァリエーションを作る際に変更する個所をマークしたダイアログをプロジェクターで提示、確認。 ②各グループで練習。 ③キーセンテンスの発音練習	全体 グループ 全体	母語話者教員：課題の説明／発音練習の際のモデル 韓国人教員：課題が理解できたかどうかを確認／発音練習の補助
7.	宿題の指示	全体	母語話者教員：宿題の説明 韓国人教員：宿題 (ページ, 練習番号) を板書

表3から見てとれるように、このタンデム授業では母語話者教員が中心となりドイツ語で授業を進め、生徒が内容をきちんと理解できるよう韓国人教員が韓国語でそれを補助するという役割分担がはっきりしていた。50分という短い時間ながらも、細部にまで配慮が行き届いた授業であり、2名の教員のチームワークの良さが感じられた。しかしながら、それぞれの生徒の動機づけや学習意欲には差があり、教室の前方に着席していた生徒たちは授業に集中し積極的に参加していたが、後方に着席していた生徒の中にはノートに落書きをしたり、眠っていたり、こっそりと音楽を聴いている者も見られ、韓国人教員が机間巡回の際に注意をするといった場面も見られた。

2.1.2 インテンシブ・コースにおける授業

インテンシブ・コースの授業は履修者が少ないため、例外的に男女が一緒に学習するクラスであった。この授業は午後の連続する2時間を使って行われており、1時間目をFr. PlöBerが、2時間目をベ・ウィスク先生が担当していた。履修している生徒は20名ほどいると聞いていたが、出席していたのは14名であった。後で理由を聞くと、1学期にこのコースを履修したものの今学期も継続して履修するかどうかわか迷っている生徒がおり、ベ・ウィスク先生と履修相談をしていたとのことであった。相談の結果、履修を続けることになった生徒が加わり、2時間目の参加者は19名であった。教科書は通常クラスと同様に『Planet 1』が用いられていたが、授業時間数の多いこのコースではすでにLektion 16の終盤を学習しており、まもなく『Planet 2』に移行することであった。Lektion 16では、「旅行計画を立てる」というコミュニケーションが学習目標で、学習する語彙は「ペットに関する語彙」、文法項目として「現在完了形」、「不定代名詞のman」、「所有冠詞のunser/euerの1・4格」を学習することになっている(Planet 1, 目次より)。授業の流れは表4および表5のとおりである。

この連続する2時間では、前半の1時間は母語話者教員によるドイツ語での授業、後半の1時間は韓国人教員による韓国語での授業であった。生徒にはそれぞれMoritz, Lotta, Paulなどドイツ語の名前が付けられており、母語話者教員はこれらの呼び名を用いていた。また、このクラスには高校入学前までドイツで生活をしていた男子生徒がおり、この生徒が中心となって母語話者教員の質問や発話に対して積極的に反応していた。クラスの雰囲気は大変打ち解けており、私語や居眠りをする生徒はおらず、通常クラスに比べ生徒の動機づけは明らかに高かった。また、筆者は1時間目と2時間目の間の休憩時間に、生徒たちにドイツ語で「ドイツ語が好きか?」、「なぜドイツ語を勉強しているのか?」などの質問を試みたが、生徒たちは質問を理解しており、完璧ではないものの、臆することなくドイツ語で答える生徒が多かった。中には、家庭教師にドイツ語を習っているという生徒もおり、この生徒は大学でドイツ語を専攻してドイツに留学することを希望しているとのことであった。しかし、全員が母語話者教員の授業をすべて理解している訳ではなく、2時間目の授業の冒頭で韓国人教員が質問はないかと尋ねたところ、かなり多くの生徒が質問をしていた。また、母語話者教員の時間には発言の少なかった生徒が、韓国人教員には積極的に質問するといった場面も見られた。インテンシブ・コースでは、『Planet 1』以外にも韓国で出版された教科書も並行して用いているとのことであったが、この日の授業では使われていなかった。コース全体を見た場合に、母語話者教員の授業で新しい項目を学習し、韓国人教員がそれらを確実に理解させ習得させるという役割分担がなされているようであった。

表4：ソウル師範大付属高校・インテンシブ・コース1年生のクラスにおける授業

1時間目：担当 Fr. Plöber

	授業での活動・作業	形態
1.	<p><導入・復習></p> <p>①あいさつ</p> <p>②前回の授業で学習した内容（『Planet 1』 Lektion 16, Nr. 10 (110ページ)）の復習：前回学習した会話の内容について、教師が生徒に質問。</p>	<p>全体</p> <p>全体</p>
2.	<p><前回からの続き></p> <p>①ダイアログ (Planet 1, Lektion 16, Nr.10) を聞き、その中に出てくる所有冠詞 (dein/mein/euer/unser) の意味が理解できているか確認。</p> <p>②教師がダイアログを読み、それに続けて生徒も読み発音練習。</p> <p>③ダイアログ中の語彙の意味が理解できているか、反意語を導入しつつ確認 (behalten - abgeben など)。</p> <p>④テキストを見ずにダイアログを聴かせる。</p> <p>⑤生徒を4人ずつのグループに分け、それぞれのグループでダイアログを役割練習 (3分間)。</p> <p>⑥すべてのグループがダイアログを前に出て発表。</p>	<p>全体</p> <p>全体</p> <p>全体</p> <p>グループ</p> <p>作業</p> <p>全体</p>
3.	<p><応用練習></p> <p>①与えられた語彙を用いて、ダイアログのバリエーションをグループで作成し、練習する</p> <p>②作ったダイアログを発表する (すべてのグループ)</p> <p>③生徒が発表したダイアログの内容を他の生徒たちが理解しているかどうか教師が生徒に質問 (Was hat der Papagai gemacht?/Was hat die Katze gemacht? 等)、生徒がそれに答える</p>	<p>グループ</p> <p>作業</p> <p>全体</p> <p>全体</p>
4.	<p><新しいテーマへの導入></p> <p>①教師が生徒に Telefonierst du gern? と質問し、生徒がそれに答える</p> <p>②ダイアログ (『Planet 1』 Lektion 16, Nr.11：電話での会話) を聴かせる。</p> <p>③ダイアログの内容について教師が質問し、生徒が答える</p>	<p>全体</p> <p>全体</p> <p>全体</p>
5.	<p><応用練習></p> <p>2人1組になり、電話でのダイアログを作りノートに書く</p>	<p>ペア作業</p>
6.	<p><宿題の指示></p> <p>・電話でのダイアログを次回までに作ってくる</p> <p>・ワークブックの練習問題</p>	<p>全体</p>

表5：ソウル師範大付属高校・インテンシブ・コース1年生のクラスにおける授業

2時間目：担当ベ・ウィスク先生

	授業での活動・作業	形態
1.	<p><復習・導入></p> <p>① 1時間目に学習したダイアログに出てきた所有冠詞とその意味を、確認。生徒からの質問を受け付け復習。</p> <p>② 教師が "Ist das dein Mäppchen?" と生徒の持ち物を指して尋ね、それに対して生徒が "Ja, das ist mein Mäppchen." と答える。同様に sein-/ihr-で教師が引き続き質問し、生徒が答える。"</p>	<p>全体</p> <p>全体</p>
2.	<p><新課題></p> <p>① 1格は Nominativ, 4格は Akkusativ とドイツ語で呼ばれることを韓国語で説明。</p> <p>② それぞれの機能の違いを韓国語で説明。</p> <p>③ 教科書の例文を教師が読み上げ、登場する所有冠詞のみを生徒全員が声に出して読む。</p> <p>④ 教科書の練習問題を各自が行う。</p> <p>⑤ 答え合わせ：ボールを投げ、それを受け取った生徒が答えを言う。</p>	<p>全体</p> <p>全体</p> <p>全体</p> <p>個人作業</p> <p>全体</p>
3.	<p><練習></p> <p>板書された文をノートに書き写し、その空欄に所有冠詞の1格または4格を入れる。</p>	<p>個人作業</p>

2.2 ソウル藝術高等学校 (Seoul Arts High School)

ソウル藝術高等学校は、キリスト教系の私立高校である。教育目標に、「キリスト教精神に基づき、芸術の専門的な教育を早期から段階的に実践することを通して、国を愛し、民族を愛し、人類に貢献できる芸術人材を育成する」ことを掲げており、音楽コース・美術コース・舞踊コースの3つのコースを設けている。音楽コース（各学年4クラス）ではドイツ語を、美術コース（各学年3クラス）と舞踊コース（各学年1クラス）ではフランス語を必修科目としており、生徒たちはそれぞれの言語を第2外国語として週2時間、2年間履修している（表6）。この学校では2年生の授業を2時間、1年生の授業を1時間見学することができた。いずれのクラスも、担当教員は、同校で24年間教鞭を取っておられるというカン・ヨンエ先生である。

表6：ソウル芸術高等学校における第2外国語の履修時間数

	音楽コース (ドイツ語必修)	美術コース (フランス語必修)	舞踊コース (フランス語必修)
1年次	2	2	2
2年次	2	2	2
3年次	0	0	0

2.2.1 2年生のクラスでの授業

最初に見学をしたクラスは2年生のクラス(38人)で、50分間の授業は基本的にまずドイツ語で、その後で韓国語で指示をしたり確認したりするという2言語併用で行われていた。教材は韓国で出版された教科書を使用しており、授業の流れは次のとおりであった（表7）。

表7：ソウル藝術高等学校2年生クラスでの授業（その1）

	授業での活動・作業	形態
1.	<p><導入></p> <p>① あいさつ</p> <p>② Welches Datum haben wir heute? と日付を教師が尋ね、生徒がそれに答える。教師は日付を板書。</p>	全体
2.	<p><復習></p> <p>黒板に矢印で「直進」「右へ」「左へ」等の方向を教師が書き、それぞれをドイツ語何と言うのか尋ね、生徒がそれに答える。発音を全員で繰り返す。</p>	全体
3.	<p><新課題></p> <p>① カセットで会話を聞かせ、この会話が行われている場所や内容について韓国語で生徒に質問。</p> <p>② どのような道をたどるのかを聞き取るよう指示し、再度会話を聞かせる。</p> <p>③ 教科書の練習問題(1)（教師は机間巡回）</p> <p>④ 練習問題の答え合わせ：教師が生徒を当て答えさせ、正答を板書。</p> <p>⑤ 教科書の練習問題(2)（教師は机間巡回）</p> <p>⑥ 答え合わせ：教師が生徒を当て、答えさせる。</p>	全体 個人作業 全体 個人作業 全体
4.	<p><応用練習></p> <p>① プリント教材（ドイツ語の歌“Wo ist hier ein Restaurant?”）の絵をOHPで見せ、何が描かれているのか尋ね、生徒からの答えを板書。② 歌詞をOHPで見せ、1行ずつドイツ語の発音と意味を確認。③ 歌を聞かせる。④ 全員で歌を歌う。（カセットに合わせて1回、カセットなしで1回ずつ）</p>	全体 全体 全体 全体

5.	<応用練習> ① プリント教材をOHPで見せ、道案内の表現を確認。 ② 練習問題（教師は机間巡回） ③ 答え合わせ	全体 個人作業 全体
----	--	------------------

この授業では、教室の前方に着席している生徒は授業に集中しており、教師からの問いかけにも積極的に答えていたが、後方に着席した生徒の中には教科書も開けず机に伏して寝てしまっている生徒が散見された。教師が机間巡回の際に注意をしていたが、あまり効果はなかった。担当教員の話によれば、やはりどのクラスにもこのような学習意欲の低い生徒が存在しているとのことであった。その理由として、この高校が芸術高校であり、そもそも専攻分野（音楽・美術・舞踊）の実技が最重要視されていること、そしてドイツ語が大学受験に直接関係のない科目であることが挙げられた。

引き続き、別の2年生のクラスの授業を見学した。授業は次のような要領で行われた（表8）。

表8：ソウル藝術高等学校2年生クラスでの授業（その2）

	授業での活動・作業	形態
1.	<導入> 出席の確認とあいさつ	全体
2.	<復習> ①練習問題（語法の助動詞を使った作文）を全体で1問ずつ行う ②文法（語順）の説明	全体
3.	<文法説明・練習> ①“zum”, “zum”, “zur”と書かれた3枚の異なる色の紙（青、緑、赤）を黒板に貼り、それぞれに合う語を生徒に尋ね、語彙を集める。 ②教師は出てきた語彙をその都度板書する。 ③道案内に必要な語彙（geradeaus/nach rechts/nach links/durch/an...vorbei/über）とそれらを示す矢印を板書し、説明する。 ④“Wie komme ich zum Café?”と学校の近くにあるカフェへの行き方を教師が尋ね、生徒に道順を考えさせ、確認。 ⑤道案内ができない時の表現“Tut mir Leid, ich bin auch fremd hier./ich weiß auch nicht./ich bin auch nicht von hier”.を導入、説明、発音練習。	全体 全体 全体 全体
4.	<語彙の導入・練習> ①交通手段を表わす語彙を尋ね、生徒から出てきた語彙を名詞の性に分けて板書する。 ②“Wie kommst du zur Schule?”と質問、意味を確認。答えの表現である“ich nehme/ich komme mit...”を板書し、意味を確認する。 ③生徒に再度“Wie kommst du zur Schule?”と全体に質問した後、生徒を当て、答えさせる。	全体 全体 全体
5.	<新課題・練習> ①ダイアログに出てくる表現（Ich steige ein/aus/um, Das ist nett/freundlich von Ihnen/dir.）を板書し、意味を確認する。 ②ダイアログを聞く ③教科書の課題（ダイアログについての質問）の意味が理解できているか、ドイツ語と韓国語で確認 ④課題を行う ⑤答え合わせ	全体 全体 全体 個人作業 全体
6.	<練習> ①教師が読み上げる質問をディクテーション ②書き取った質問に答える	全体 個人作業

このクラスでは先に見学したクラスに比べ、教師の問いかけにも多くの生徒が口々に答えを言ったりするなど積極的な参加が見られた。特に印象的だったのは、学校の近くにあるカフェへの行き方や通学の手段を尋ねられた時に、質問が自分たちの生活範囲に及んだことを、生徒たちが楽しんでいただことである。特に通学手段を聞かれた際には、数人の学生が即座に“Bongo!”「ボンゴ」と答えて教室内の笑いを誘っていた。後で尋ねたところ、この学校にはソウル市内で裕福だとされている江南（カンナム）地区から通学する生徒達が多く、学校までの交通の便が良くないこともあり、運転手付きのマイクロバスを共同でチャーターして通学しているようで、その車種が Bongo とのことであった。

2.2.2 1年生クラスでの授業

次に見学したのは1年生（42名）のクラスで、2年生と同様、韓国で出版された教科書が使用されていた。授業の流れは次のとおりであった（表9）。

表9：ソウル藝術高等学校1年生クラスでの授業

	授業での活動・作業	形態
1.	<p><導入></p> <p>①出席の確認</p> <p>②あいさつ</p>	全体
2.	<p><復習></p> <p>①3つの色が異なる袋（青い袋は男性名詞、緑色の袋は中性名詞、赤い袋は女性名詞）から人形やボールなど実物を取り出し、生徒に“Was ist das?”と尋ねる。生徒はそれに対して、“Das ist ein/eine...”と口々に答える。</p> <p>②教師が実物を見せ、“Ist das ein/eine...?”と質問し、“Ja, das ist ein/eine...”と生徒が答える。これをすべての実物で練習。</p> <p>③教師の持っている物と生徒の持っている物について、“Ist das dein/deine...?”と所有冠詞を用いて尋ね、生徒はそれに対して“Nein, das ist dein/deine...”もしくは“Ja, das ist mein/meine...”と答える。</p> <p>④名詞の性に応じて色分けされた紙に（青＝男性名詞、緑＝中性名詞、赤＝女性名詞、黄＝複数形、不定冠詞（ein/ein/eine）、所有冠詞（mein/mein/meine/meineと dein/dein/deine/deine）が書かれたカードを黒板に貼り、名詞の性とそれに応じて冠詞が異なることを提示・説明</p>	全体 全体 全体 全体
3.	<p><新課題></p> <p>①プリント教材（時間割）をOHPで提示し、生徒たちの実際の時間割について尋ね、例としていくつかの時間に教科名を書き込む。</p> <p>②教科に関する語彙を全員で発音練習。</p> <p>③各自で自分の時間割を作成。</p> <p>④生徒を当て、時間割を説明させる：“Am Montag in der ersten/zweiten/... Stunde habe ich ...”</p> <p>⑤曜日を全員で発音練習。</p> <p>⑥in der <u>ersten/zweiten/dritten</u> Stundeと序数を変えて発音練習。</p> <p>⑦2人1組となり、それぞれが異なる時間割を用いて、自分の時間割では空欄になっている個所について“Was hast du am Montag in der zweiten Stunde?”のように尋ね、答えを記入する。</p>	全体 全体 個人作業 全体 全体 全体 ペア作業

2年生のクラスに比べ、1年生のこのクラスでは生徒がほぼ全員授業に集中していたことが印象的であった。担当教員によれば、1年生は毎年どのクラスでも学習意欲が高く授業にも集中しているが、2年生のクラスでは大学受験が視野に入ると共に、学校外で専攻科目である楽器や美術、ダンス等のレッスンを受ける生徒が多く、その練習に多くの時間を費やさなければならぬため、

授業に軽重をつける傾向が強くなるとのことであった。

2.3 梨花女子外国語高等学校 (Ewha Girl's Foreign Language High School)

キリスト教系の梨花財団が1991年に設立した梨花女子外国語高等学校は、ソウル大学や延世大学、高麗大学や梨花女子大といった韓国トップレベルの大学への合格者を多く排出する韓国有数のエリート高校に位置付けられる。この学校はその目的として次の3点を掲げている。

1. Strengthening Basic Academic Abilities

To ensure student's academic ability in basic subjects so that they will be able to make progress in their major studies when they become university students.

2. Fostering Foreign Language Competence

To provide high-quality teaching of foreign language so that students will be proficient at reading and speaking in at least two foreign languages.

3. Providing Character-Building Education

To strengthen character-building education based on Christian ethics so that students will become well-mannered leaders with both a broad-minded humanity and an excellence in intellectual power.

(梨花女子外国語高等学校のパンフレットより)

2番目の目標として「少なくとも2つの外国語において、読むことと話すことに熟達できるように、質の高い外国語教育を提供する」とあるように、この学校には、英語コース・ドイツ語コース・フランス語コース・中国語コースの4つがあり、生徒たちは第1外国語としてそれぞれの言語を、また、第2外国語として英語もしくは中国語を必修科目として履修する。さらに、第3外国語として中国語かフランス語を選択科目として履修することもできる(表10)

表10：梨花女子外国語高等学校各コースにおける履修可能な外国語

	英語コース (2クラス)	ドイツ語コース (1クラス)	フランス語コース (2クラス)	中国語コース (1クラス)
第1外国語	英語	ドイツ語	フランス語	中国語
第2外国語	中国語	英語	英語	英語
第3外国語	フランス語	中国語/フランス語	中国語	フランス語

第1外国語から第3外国語のカリキュラムは表11のように決められており、ドイツ語コースの生徒は第1外国語としてドイツ語を1週当たり8～18時間を学習している。この学校で創立当初から専任教諭としてドイツ語を教えているイ・ソニ先生によれば、ドイツ語コースの履修生の3分の1から半数が、2年次終了時点でゲーテ・インスティトゥートのドイツ語統一基礎検定(Zertifikat Deutsch)に合格するという。2年次終了時までの総学習時間数は約960時間に達することを考えれば、このレベルに達するのはそれほど難しいことではないと思われる⁶⁾。しかしな

から、この授業時間数を確保できているのは、この学校が私立の高等学校であり、1日に8時間の授業時間数を確保していることによるものである（表12）。またドイツ語と英語については、時間によって1クラスを2つに分けて行い、少人数での授業を行っていることも、生徒の多くがある一定のレベルに達することにも寄与していると思われる。

表11：梨花女子外国語高等学校における外国語のカリキュラム（同校パンフレットより）

	科 目	1年次	2年次	3年次
第1外国語	Reading I	4	4	
	Reading II		8	
	Conversation I	4		
	Conversation II		4	
	Composition I			5
	Composition II			5
	Grammar			4
	Listening			4
第2外国語	Language I	6		
	Language II		8	
	Reading I			3
	Reading II			3
	Grammar	4		
	Conversation I	4		
	Conversation II		4	
	Listening			2
第3外国語	Language I		4	
	Listening			2
合 計		22	32	28

表12：ドイツ語コース1年生の時間割

	月	火	水	木	金
1時限	社会 B	科学 B	国語 B	英語／ドイツ語	英語 A
2時限	数学 A	国語 B	ドイツ語 (PlöBer/Lee)	ドイツ語／英語	ドイツ語 (PlöBer/Lee)
3時限	ドイツ語	美術	ドイツ語 (Lee/PlöBer)	数学 A	ドイツ語 (Lee/PlöBer)
4時限	社会 A	礼 拝	英語 B	数学 B	道 徳
5時限	保 健	数学 B	聖 書	社会 A	ドイツ語／英語
6時限	英 読	英語 B	科学 A	音 楽	英語／ドイツ語
7時限	国語 A	体 育	国語 A	英 読	科学 B
8時限	国語 B	歴 史	英 語	国 語	数 学

2.3.1 梨花女子外国語高等学校における母語話者教員による授業

この高校も2009年にドイツ連邦行政庁の在外学校中央機関（Zentrale Stelle für das Auslandsschulwesen）のDSD-Schuleと認定され、母語話者教員はソウル大学校師範大学付属高校でも教鞭を取っているFr. PlöBerであった。筆者が見学したのはドイツ語コース1年生の授業で、使用教材は『Planet 1』であった。この日の授業ではLektion 14を取り扱っており、Lektion 14の目標とするコミュニケーションは「誰かを招待する／鼓舞する」と「自分を正当化する」、学習する語彙は「家ですること」であり、学習する文法項目は「habenを用いた現在完了形」である（Planet 1, 目次参照）。授業の流れは次のとおりであった（表13）。

表13 梨花女子外国語高等学校ドイツ語コース1年生クラスでの母語話者教員による授業

	授業での活動・作業	形態
1.	<導入・復習> ①あいさつ ②宿題の答え合わせ	全体
2.	<新課題> ①教科書の練習問題（96ページ, Nr. 2）：教師が語彙を発音、後に続けて発音練習。 ②語彙の意味が理解できているか確認。 ③同じ音でも綴りが異なる場合があることを教師が説明（eu/äu）。	全体 全体 全体
3.	①教科書のテキスト（97ページ, Nr. 4, “Armar - der Roboter”）を教師が音読し、一行ずつ生徒が後に続けて発音練習。 ②2分間を与え、各自でテキストを黙読し、すでに知っている単語に下線を引かせる。 ③下線を引いた語を全体で集める。 ④テキストについて教師が質問し（Was macht Armar?/Was arbeitet er? 等）、生徒がそれに答える（その際には一語ではなく文で答えさせ、必要に応じて、答えの文を全員で繰り返し発音練習する）。	全体 個人作業 全体 全体
4.	<新課題> ①ダイアログ（98ページ, Nr. 5, “Telefongespräch”）を聞かせる。 ②教師はダイアログの内容に関する質問をし、生徒が答える。	全体 全体
5.	<応用練習> 2人1組になり、教科書で与えられた語彙を用いて、ダイアログのヴァリエーションを作る。 （時間切れのため、完成させることが宿題として出される）	ペア作業

この授業は外国語授業専用の教室で行われた。この教室には可動式の机と椅子、教師用のパソコンやプロジェクター等が設置されており、4～5名の生徒が1つの「島」を作る形で着席していた。授業はすべてドイツ語で行われた。生徒たちにはドイツ語での名前が付けられており、教師はその名前で生徒を呼んでいた。生徒たちは教師の指示や説明をほぼ理解しており、教師の問いに対しても、一語文であることがほとんどであるものの、戸惑うことなくドイツ語で答えているのが印象的であった。

2.3.2 梨花女子外国語高等学校における韓国人教員による授業

次に、同じクラスで韓国人教員による授業を見学した。担当教員は前述のイ・スニ先生である。授業は場所を変え通常のクラスで行われ、全員が黒板に向かって着席していた。担当教員は基本的にドイツ語で授業を進めていたが、質問に対する答えや説明には韓国語を使用していた。授業は次のような内容であった（表14）。

表14：梨花女子外国語高等学校ドイツ語コース1年生クラスでの韓国人教員による授業

	授業での活動・作業	形態
1.	<p><復習／練習> ①教科書のダイアログ（96 ページ, Nr. 1- a, “Bei der Manuel zu Hause”）を聞く。 ②各面に Wer?/Wann?/Was?/Wie oft/Warum?/? が書かれた立方体のボール箱を教師が見せ、生徒は見せられた面に書かれた疑問詞を用いてダイアログに関する質問を作る（「?」の書かれた面では、ja/nein で答えられる質問を作る）。</p>	<p>全体 全体</p>
2.	<p><新課題> ①教科書のダイアログ（99ページ, Nr. 6, “Die Schwester ist da!”）を聞く。 ②教師が会話に登場する姉役、生徒全員が Manuel 役になり、会話の役割練習。 ③2人1組になり、役割練習。 ④生徒を当て、会話を演じさせる。必要に応じて発音を訂正し、全員で後に続けて発音練習。</p>	<p>全体 全体 ペア作業 全体</p>
3.	<p><応用練習> ①ダイアログの表現を使った短い会話を板書して導入： A：Du musst ... B：Ich habe schon ... ②教科書に出ている表現を使って、口頭で会話の練習。 教師が “Du musst ...” と言い、それに対して生徒が “Ich habe schon...” と答える。</p>	<p>全体 全体</p>
4.	<p><文法練習> 教師が動詞の不定詞を言い、その過去分詞を生徒が口々に答える。</p>	<p>全体</p>

この授業が始まる前には、数名の生徒が担当教員に前の時間で理解できなかった文法項目について熱心に質問をしていた。ベテラン教員の授業ということもあったのだろうか、生徒たちも緊張感を持って授業に参加しており、大変集中して学習をしていた。授業の後で生徒に話しかけ、ドイツ語を選んだ理由を尋ねたが、「ドイツ語を勉強してみたかったから」という答えがほとんどで、特別な動機づけがあるようではなかった。しかし、「ドイツ語学習が楽しいか?」という問いに対しては、一様に「楽しい」と答えており、「大学でもドイツ語を専攻したい」、「ドイツに留学したい」という生徒も見られた。

3. 韓国の高等学校におけるドイツ語教育における問題点

今回の視察では、授業見学の後でそれぞれの担当教員と懇談する機会を設け、韓国の高等学校におけるドイツ語教育が抱える問題点についても話を聞いた。見学を行った3つの高等学校はそれぞれの性質が異なり、教員が抱える問題点も様々であったが、いずれの教員からも「生徒の動機づけ」と「時間の確保」が挙げられた。ここではこの2点に焦点を当てることにする。

3.1 生徒の動機づけに関する問題

ソウル師範大付属高校は、かつてはいわゆるエリート進学校の1つであったが、1974年に実施された「人文系高等学校標準化措置」により、高校進学希望者は居住する地区によって機械的に進学し得る学校群が決定されるようになり（有田 2006）、この学校は生徒の学力からすればごく一般的なレベルの高校であると聞いた。これに対しソウル藝術高校と梨花女子外国語高校は特殊

目的高校⁷⁾にあたるが、ソウル藝術高校では芸術実技が重視されており、学力という点では生徒間に差があるようであった。そのためか、ソウル師範大付属高校の通常コースやソウル藝術高校の授業では、熱心な生徒とそうでない生徒、よく出来る生徒とそうでない生徒がはっきりしており、いずれの担当教員もこのことを授業を行う上での問題点の1つとして挙げていた。また、韓国では大学進学の際の競争が激しく、第2外国語であるドイツ語が入試とは直接関係のない科目であること⁸⁾も生徒の動機づけを保つことのできない要因であるとのことであった。

生徒の動機づけを左右する間接的な要因として、日本語や中国語の人気が高まったことも挙げられる。韓国では1968年以降、高等学校において英語以外の外国語が選択必修科目⁹⁾となっており (Lie 2003), 1982年には日本語もその1つとなった。日本語が解禁となった当初は、主に職業学校において日本語学習が盛んであったが (Min 2003), 1998年に金泳三政権下で日本の文化が解禁になったことを機に、日本語の人气が一層高まった。その結果、日本語の履修を希望する生徒が増加しており、日本語を学びたいにも関わらず、その機会が与えられずにやむなくドイツ語を学んでいるといったことも、学習に対する動機づけを低下させることの一要因となっているとのことであった。

他方、独自の入学試験を行っている梨花女子外国語高校では¹⁰⁾、生徒間の学力の差はあまり見られず、生徒の動機づけは非常に高い印象を受けた。そもそもこの学校には外国語学習に興味を持つ学力の高い生徒が集まってきているため当然とも言える。しかしそれ以外にも、韓国では日本よりもさらに学歴が重視されており、留学の持つ社会的な意義やステータスも日本に比べ高く、そのことに比例するように外国語学習も盛んである。このような社会的環境において、外国語高校という特殊なエリート校、しかも韓国トップレベルの私立大学と同系列の学校で学ぶことへの自信と誇りが、生徒の動機づけを支えていると考えられる。また、次に述べる「時間の確保」とそれに伴う学習効果も梨花女子外国語高校での高い動機づけにつながっていると思われる。

3.2 授業時間数確保に関する問題

すでに述べた梨花女子外国語高校のカリキュラム (表11) と時間割 (表12) からわかるように、この学校では外国語に多くの授業時間を費やしている。日本と同様、韓国の高等学校でも一般的には1日の授業時間が6時間～7時間であるが、私立高校である梨花女子外国語高校では1日に8時限目まで授業がある。このことが多くの授業時間をドイツ語に充てることを可能にしている。

これに対してソウル師範大付属高校ではインテンシブ・コースを設けてはいるが、授業時間確保のためには課外授業という方法を取っている。課外授業の科目としてドイツ語を設置することは、DSD-Schule に認定されたことで可能となったとのことである。

ソウル藝術高校では課外授業は行っておらず、生徒たちは1週間に2時間の授業を2年間履修している。また、ソウル師範大付属高校通常コースの生徒たちは1週間に3時間を2年間履修する。多少の差異はあるものの、韓国の一般的な高校生の第2外国語の総学習時間は120～180時間程度となる。ゲーテ・インスティトゥートのホームページ¹¹⁾には、欧州評議会の定める語学レベルのA1に到達するには「45分の授業を80～200時間受講することが必要」とあり、韓国の一般的な高校生は学習時間からすれば、このレベルに達することが可能である。A1レベルの検定試験である「スタート・ドイツ語1」に合格した場合に証明される能力¹²⁾は、例えば「日常生活の場面での簡単な質問や指示、話、留守番電話のメッセージやアナウンス、短い会話を理解すること

ができる」や「身近な状況で質問やお願いしたり、それらに反応したりすることができる」等とされており、仮にこのような運用能力を短期間に身につけることができれば、学習者は学習の効果を感じることができ、達成感を持つこともできるであろう。しかし韓国の一般的な高等学校の場合、このレベルに達するまでに2年間を要しており、生徒たちが「対時間効果」を感じることは難しいと考えられる。このように、学習のために十分な授業時間を確保できないことも、生徒の動機づけを低下させる一因となっていると推測される。

4. まとめ

今回の現地視察を通して、韓国の高等学校におけるドイツ語教育は生徒の動機づけや時間の確保など、日本の大学におけるドイツ語教育と同様の問題を抱えていることが分かった。しかし、質の高いドイツ語教員と学校の意欲的な取り組みにより、高校の段階である程度のドイツ語運用能力を身につけた人材を毎年一定人数輩出することに成功している。また、2001年には中学校においても選択科目として第2外国語の導入が可能となり (Lee 2003)、学校教育の枠内における外国語学習の機会保障がますます拡充・強化される方向にあることがわかる。このことは、樋口 (2006) の言うように、「天然資源の乏しい韓国では、人的資源の開発に政府が力を注いできた」ことの表れである。また、中等教育の段階で英語以外の外国語を学ぶことは、たとえそれが短期間で成果をあげることに繋がるにしても、その先の高等教育において何をどこで学ぶかを選択する際の判断材料を与えることになる。現にドイツの大学への留学する韓国人は、日本の2倍以上であり¹³⁾、これも中等教育における外国語教育の効果であると思われる。

異文化理解における外国語の役割を大谷 (2007) はモノサシに例え、外国語を学ぶことを通じて生徒・学生は自分の慣れ親しんだモノサシが他者には通用せず、自分流のモノサシでは他者は測れないことを明瞭に示してくれるものであると述べている。そして、異文化理解の立場に立てばこのモノサシを多く併せ持つ者が「有利」であるとも述べている。この考えに従えば、韓国語と英語、そしてもう一つの外国語という3つのモノサシを併せ持つ韓国人は、日本人よりはるかに有利な立場にあるのである。

日本においても、昭和62年 (1987年) 12月の教育課程審議会答申において、「国際理解を深め、我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視すること」が基準改善の基本方針の1つとして掲げられ¹⁴⁾、新しい学習指導要領1990年代初頭から「特色ある学科の設置」という名目で高等学校における国際教養科の設置とそれに伴う英語以外の外国語導入が始まった。大阪府を例に取れば平成2年 (1990年) から府立高校での国際教養科設置が開始されたが、平成17年 (2005年) の時点で、163校ある府立高校の中で、英語以外の外国語を開講している高校は91校で、約3,000人の高校生が英語以外の外国語を学んでいると発表されている¹⁵⁾。しかし、平成17年度の大阪府下の高校生数は228,084人であり、英語以外の外国語を学んでいる高校生の割合は、わずか1.3%にしか過ぎない。

日本では、大学で英語以外の外国語を初めて学ぶというのが一般的である。90分の授業を週2コマ1年間履修した場合、総学習時間数はおおよそ90時間となり、韓国の高校における2年間の総学習時間数とほぼ同数となる。韓国では中等教育で学んだドイツ語を基礎として大学でさらに学習を積み、比較的短時間で高度なドイツ語を身につけることも可能であるが、日本でそれは難しい。ドイツ語を学び始めた学生が、「専攻分野の専門書をドイツ語で読みたい」、「ドイツの大学で学びたい」といった希望を持った場合、それに至るまでの道程は遠く¹⁶⁾、結局は学生自身の

努力に頼るしかないというのが現状ではないだろうか。

「異文化理解」や「国際理解」、「グローバル化」等が教育分野でのキーワードとして用いられるようになって久しいが、そのための中等教育における取り組みという点において、日本は韓国のはるか後ろを歩んでいる。また、韓国を含む諸外国の多くでは中等教育で行われている英語以外の外国語教育が、高等教育まで持ち越されているということは、日本の言語教育政策がいかに立ち遅れているかということを示している。

注

- 1) 本研究は平成21年度科学研究費補助金基盤研究(C)19520490の成果の一部である。
- 2) 1953年にユネスコが国際理解を目的として開始したプロジェクトで、世界179カ国で幼稚園から教員養成機関までの教育機関の8,500校が認定されている。ソウル大学校師範大学付属高等学校では、このプロジェクトの一環としてこれまで国際理解をテーマとした演劇プロジェクトや、「世界遺産」に関する授業などが行われてきた。また同校は、同じくASPnet schoolであるラオスのSikhottabong High Schoolと姉妹校提携を結び、継続的な教育・文化交流を行っている。
- 3) 1,000以上のパートナー校のネットワークを世界中に構築し、若者に現代のドイツとドイツ社会に対する関心呼び起こすために、ドイツ連邦外務省がコーディネーターとなり、在外学校中央機関(Zentralstelle für Auslandsschulwesen)とゲーテ・インスティトゥート(Goethe-Institut)、各州文部大臣会議教育交流会(Pädagogischer Austauschdienst der Kultusministerkonferenz)およびドイツ学術交流会(Deutscher Akademischer Austauschdienst)が協力して実施しているプロジェクト“PASCH”の一環として、現地の高等学校をDSD-Schuleとして認定し、その学校におけるドイツ語教育の強化やドイツ語検定試験の実施、奨学金の授与などを行っている。
- 4) 韓国の高等学校は2学期制で、1学期は3月から7月、2学期は8月末から1月初旬までである。
- 5) “Planet Deutsch für Jugendliche”は Hueber 社から出版されている全3巻の教科書である。Planet 1, Planet 2, Planet 3はそれぞれ欧州評議会の定めるA1, A2, B1レベルに対応している。大きな特徴として、第1課からduを用いていることが挙げられる。そのため教科書中の指示も例えば“Schau das Bild an und hör zu.”と記されている。また、第1巻ではコミュニケーションのパートナーをクラスメートや家族に限定しているため、敬称のSieは全く導入されていない。
- 6) ゲーテ・インスティトゥートのホームページによれば、欧州評議会の定める語学レベルに到達するために必要とされる授業時間数のめやすは次のとおりである。いずれも1時間は45分の授業を想定している。
 - A1レベル：80～200時間
 - A2レベル：200～350時間
 - B1レベル：350～650時間
- 7) 特株目的高校には、芸術高校、体育高校、科学高校、外国語高校がある。日本の文部科学省にあたる韓国の教育人的資源部・韓国教育開発院『教育統計年報』2009年度版によれば、韓国全土で27の芸術高校(国立2, 公立7, 私立18), 15の体育高校(公立14, 私立1), 21の科学高校(国立1, 公立20)そして30の外国語高校(公立12, 私立18)がある。

- 8) 韓国では日本の大学入試センター試験にあたる「大学修学能力試験」の成績がそれぞれの大学への合否を決める。この大学修学能力試験にはドイツ語やフランス語、中国語や日本語といった第2外国語も入試科目となっている。しかし、第2外国語での得点の扱いについては各大学によって異なり、その得点が重要視されることは稀である。
- 9) 1997年から始まった韓国の第7次教育に基づく第7次高等教育課程には、英語以外の外国語として新たにアラビア語が、従来からあるドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・日本語・ロシア語に加わった。
- 10) 私立高校である梨花女子外国語高校では、独自の入学試験を実施することが可能である。同校のパンフレットによると、入試は前・後期の2回行われており、前期入試では中学校2年次と3年次のすべての履修科目において上位4%の成績を、後期入試では8%以内の成績を取ることが目安となっている。
- 11) <http://www.goethe.de/lrn/prj/pba/bes/sdl/vor/jaindex.htm> を参照。
- 12) <http://www.goethe.de/lrn/prj/pba/bes/sdl/jaindex.html> を参照。
- 13) ドイツ学術交流会の発表した2008年度のドイツにおける先進国出身の留学者数トップ20のうち、韓国人留学生は3,963人で第3位である。日本人は1,838人で第9位となっている。
<http://www.wissenschaft-weltoffen.de/daten/1/6/5> を参照。
- 14) http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad198801/hpad198801_2_187.html を参照。
- 15) <http://www.pref.osaka.jp/jidoseitoshien/kokusaikyoku/kokusai05.html> を参照
- 16) 広島大学では、1年次に初級のインテンシブ・コース（週4コマ）と2年生以上を対象にした中級インテンシブ・コース（週2～3コマ）を設けている。これまでの経験では、中級インテンシブ・コースの修了者は無理なく欧州評議会のA2レベルに到達するが、B1レベルに到達するためには、さらに1年間、最低でも週2コマ程度の授業を受講することが必要である。

参考文献

- 有田 伸 (2006). 『韓国の教育と社会階層』 東京大学出版会
- 樋口 晶彦 (2006). 「日本の外国語教育改革 — 韓国の第7次教育改革とヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) の理念から —」 『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』 第58巻, 1-26.
- LIE, Kwang-Sook (2003). Überblick über die Geschichte des Deutschlernens und des Lernens anderer Fremdsprachen. In AMMON, U./CHON S.H.(Hg.) (2003) *Die deutsche Sprache in Korea*. München: Idicium, 213-228.
- MIN, Hyang-Ki (2003). Deutsch als Fremdsprache an den heutigen koreanischen Schulen. In AMMON, U./CHON S. H. (Hg.) (2003) *Die deutsche Sprache in Korea*. München: Idicium, 245-253.
- 大谷 泰照 (2007). 『日本人にとって英語とは何か』 大修館書店
- 吉満 たか子 (2008). 「日韓ドイツ語学習者の比較調査研究」 『広島外国語教育研究』 12, 187-200. 広島大学外国語教育研究センター

ABSTRACT

German Lessons in the High Schools of Korea

Takako YOSHIMITSU

Institute for Foreign Language Research and Education
Hiroshima University

In August 2008, a survey was conducted with the intention of gaining insights into the profiles and motivation of Japanese and Korean learners of German at a summer course of the University of Hamburg (Yoshimitsu 2009). Using a questionnaire, it was found that most of the Korean students started to learn German during high school and were better at communication in German than the Japanese students, whereas all of the Japanese students began to learn German in college and tended to have difficulties, especially in speaking German. In order to investigate the effects and influence of Korean high school German lessons on such differences, in September 2009 I visited German classes in three high schools in Seoul, Korea. This article reports on situation associated with German lessons in Korea.

By visiting classes in Korea, it was found that there are common problems between Korea and Japan, such as the motivations of students and the small number of lessons. But all students in Korea study English and another foreign language in secondary education, and some students succeed in reaching the basic (or sometimes more-than-basic) level in German before entering university.

As Ohtani (2007) remarked from the viewpoint of cross-cultural understanding in education, a foreign language is a tool, such as a ruler. A ruler, in itself, has limited value. But the more foreign languages a person knows, the better cross-cultural understanding is. Although all students do not succeed in learning, Korea provides a lot of students with an opportunity to learn at least two foreign languages. In comparison, in Japan, very few students learn two foreign languages. Interestingly, in Osaka Prefecture there are 3,000 students who study a second foreign language in high school. But this is only 1.3% of the high school students in the Osaka area. Japan is far behind Korea with respect to promoting cross-cultural understanding.